

とよなか国際交流協会の30年を振り返る

記録まとめ

【1. 登壇者から①】

田中逸郎さん

(NPO法人NPO政策研究所理事、元豊中副市長、コミュニティ政策学会理事。国流設立時の担当職員。現協会理事。)



協会ができるまで、行政は国の機関委任としての業務（外国人登録など）をしていたが、1980年頃から様々な人権課題に取り組んできた。

行政…社会保障制度や職員採用の国籍条項を撤廃。
教育…在日外国人教育基本方針を策定（1980年）。

地域…国際交流委員会（審議会）を立ち上げ、外国人が住民として生きていけるまちをつくるにはどうしたらいいか検討。「**不当な差別をなくすだけでなく、日本人住民と外国人住民が理解し合う、対等な関係をつくりましょう**」といった提言をもとに1993年に協会・センターを設立

行政から▶

国際化施策推進方針を策定。市の総合計画でも取り上げる。市民がどう参加し、協働していくか…という枠組みを整える。

市民と取り組む▶

協会は中間支援組織であり、センターはその拠点。
市・協会・市民のフラットな関係づくりを進めながら、市民同士がともに暮らす地域づくりを進める。

【大きな課題も・・・】

外国人は一緒に地域を創っていく主体として扱われていない

「郷に入りては郷に従え。外国人差別はしませんが、ルールを守らない・騒がしいので嫌いです」…同化を強いるか分離・排除する
「困っている外国人を助ける」…支援する対象に留まりがち

榎井縁さん

(大阪大学大学院特任教授。1998年から2013年まで働いていて、その後、協会理事)



国流は第三セクターとして市の予算で設立されている。また、指定管理者制度の導入、公益財団法人への移行、施設移転などの際、現場からなのでボトムアップが難しくなり、制度や行政との間でジレンマが生まれることも。

国流のポジショナリティ（どんな目線か）

- ・「SOSが出せない」等、より周縁化される人たちを中心に
- ・90年代から外国人の女性や子どもの居場所づくり、退去強制の子どものための署名活動、DV相談会…
- ・地域で暮らしている外国人の女性が多言語スタッフとして関わる…

お客様ではなく、主体的に。外国ルーツの職員の存在も大きかった。

**「外国人を支援する／外国人が頑張る」だけではなく、
「外国人が暮らしにくい社会を変えたい」。**

【広がり課題】

日本語教室は市民が参加する日本語交流活動へ。数も増加。
図書館などの市の施設との信頼関係の中で市民活動が広がる（「おやこでにほんご」、しょうないREK、赤ちゃんからのESD）
協会事業だけでなく、市民活動にも広がっていった。しかし、

まだ支援や居場所につながっていない外国人も多い

国流のふりかえりの視点：双方向性、ボトムアップ、居場所、エンパワメント

【II. 色々な参加者から】

初めて日本に来た時、
「この国ではもう何もできない、
国に帰らないといけない」って思った。

1年ぐらい、どこに行けばいいか分からなかった。でも、偶然出会った人にセンターに連れて来てもらい、とても感謝している。

周りにネパール人がほとんどおらず、寂しくてどうしたらいいかと思っていた。

厳しい労働状況の中で働いている外国人もいる。
格安のお弁当ってだれが作っている？と思うことがある。

活動の中で試行錯誤をして、
たくさんの失敗もしてきているが、
ごった煮のような幅があるし、
だれか聞いてくれる人がいる。

何かを進めようとする時に、
いつも賛同、協力してくれる
仲間が存在がある。

「ずっと家の中にいたのに、私でもできることがあるんだ。子どもたちと交流できてうれしかった。家から一歩外に出れた。社会に携われた。」

ボランティア経験は思い出ではなく、
今やっていることの基になっている。
国流は種まきをしている。

人に引っ張られて、支えられて、
今に至る。「アリジゴク」みたいに
人を引きずり込むような力に
自分が生かされている。

どんなふうに人権保障を実現していくか、
民主主義を実現していくか考えている。

通訳派遣や日本語の
巡回指導があるが、
高校入試の壁は非常に
厳しい。

センターでネパール語ができるスタッフと出会い、
いろいろ助けてくれる市民と出会い、
毎日センターに来るようになり、
いろんなことができるようになった。

参加者から「おやこでにほんごは自分の
実家みたいだ」って言葉をもらった。
ずっと続けること、継続していくことで
築ける人と人との関係がこの言葉につな
がったかなと思う。

職場では日本語を
話す機会はないけど、
ここに来たら日本語で
話せる。

「安心していられる
場」と「参加者と関係
性を作ったうえで、参
加者が何をするか自分
で決める」ことを大事
にしている。

フロアからの声



声を受けて、未来に向けて

【III. 最後に：登壇者から②】

- 国流の居場所をこれから地域のコミュニティにどうやって広げていくか。ともに学ぶ、共生のコミュニティになれるか。
- 外国人がいろいろと学んだり、力をつけるだけでなく、地域がどう変わっていくか。考えるだけでなく、実際にやっていくこと。
- 無関心層、多文化共生は自分に関係ないと思っている人たちをどう巻き込んでいくか。

【IV. 多文化共生をすすめるときに、大事にしたいこと】

※参加者アンケートから

- ・ 「支援される人が支援する側になる」ことを考えながら、居場所をあちこちに作っていく。拠点から外へ。
- ・ 新規エントリーしやすい仕掛け。
- ・ 市民活動の担い手の状況の変化（担い手の減少や高齢化）をしっかりとらえること。それが活動の未来につながるのではないか。
- ・ 行政、国流、社協、NPO…できること／できないこと、文化も異なるが、お互いに理解してつながる。

